

古事類苑

歳時部 十二

年始祝四

供御藥

〔増山の井〕御藥を供す〔中略〕屠蘇、白散、度瘴散

〔節用集主〕屠蘇トソビヤクザン白散飲之藥也正月一日

〔下學集下〕屠蘇飲食白散家飲之正月一日飲此藥也一人飲之一家無病也一人飲之一家無病也一人飲之一家無病也

〔日次紀事正月〕元日 一獻供屠蘇古者屠蘇之屠、忌死尸之尸、加一點作戶、是本朝之故實也

〔世諺問答〕正月 問て云、元三の日は屠蘇白散の酒を呑と云事ありや、屠蘇とはいかなるいはれにてなづけ侍るにや、答、此ことは醫心方金谷園記などいふ書にしるせり、屠蘇は草庵の名なりむかし草の庵りに住ける人の、此藥をその里の人のかたへおくりて、大晦日に井の中にひたして、元日にとりいだして、酒樽にひたしてこれをのまば、其年疫氣にかさるまじきといへり、一人これをのめば一家に病なし、一家にのめば一里に病なしといふ功能侍り、

〔歌林四季物語春〕とそと名付くるは、なべては人のゑらぬことなるべし、古き藥のかみのつたへし文には、ゑはくといひしくすしのはかせもろこしにいまそかりし頃、こしらへためりしやく方にて、屠は割なりとかや、蘇は鬼の總名など聞えて、そのあしきおにのわざはひのさきだちぬべきやくとこありて、一人これをふくすれば一家やまふなく、一家これを用ゆれば一さとのわづらひをやむるとつたへたる文にも侍るならし、